

これからの幸せ 第6回 in 名古屋

2023年11月28日(火) 三井住友海上 しらかわホール | 主催 浄土宗 後援 中日新聞社

第一部 講演/演奏と語り

尾木直樹(教育評論家、法政大学名誉教授)※講演
廣津留すみれ(ヴァイオリニスト)※演奏と語り

第二部 座談

尾木直樹
廣津留すみれ
澤田和幸(清須市・信教寺副住職、東海学園高等学校学監・教頭)
戸松義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



「辛さの中に生きる今の子どもたち(尾木さん)」

まずは、「尾木ママ」と尾木直樹さんの講演です。中学・高校・大学と44年にわたり教壇に立ち、「子どもたちの声を代弁するのが教師の仕事」と言う尾木さんは、「私たちの世代の青少年期は、戦争もパンデミックも過去から学ぶものでしたが、今の子どもたちにとって、それはリアルタイムの出来事」と語りだします。

コロナ禍が始まってまもなく、尾木さんは保育士から、「今年の赤ちゃんは無反応」と耳にします。様々にあやしても、きゃっきやと笑うことなく静かに横たわっていると…

尾木さんは保育士のマスクのせいと気づきましたが、未知の感染症のさなか、外すわけにもいきません。

小学～高校生を対象とした2021年の調査では、多くに鬱傾向がみられ、自殺者は統計開始以来最高だったといえます。「今の日本の子どもたちは、大人の世代が経験していない辛さのなかで生きています。それだけでも『よく頑張ってるね』と最大限にリスペクトすべきです」



「ありのままに今を輝く」(尾木さん)

サインを求められると尾木さんは「ありのままに今を輝く」と書きます。その原点にはお母様の教えがありました。

「母は、『勉強しなさい』と一切言わない人でしたが、学校から帰ると、『今日の予定はどうなってるの?』と聞くんです。そしてその通りに宿題や勉強を終えたとすぐ褒めてくれました」

あるとき、ひとつの歌をお母様から教わります。それは法然上人の弟子である親鸞聖人の歌でした。

明日ありと思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものかは…今美しく咲いている桜も夜に嵐で散ってしまうかも知れない—今日できることは今日やる。目の前のことに精一杯

取り組む大切さを教えてくれたと。子どもたちをめぐる「これからの幸せ」にとって、明るい兆しもあると言います。

「2022年に生徒指導提要在改訂され、今年4月に施行された『こども基本法』には『児童の意見の尊重』が掲げられ、子どもたちの意見を取り入れた『校則の一斉見直し』が始まっています。私たちの世代には考えられない進化です」

「これからは『子どもセンタード』(子ども真ん中)の時代。上下関係ではなく、大人と子どもが対等に手を取り合うパートナーシップが、『ウエル・ビーイング』を目指す社会には大切」と締めくくりました。



「生」の素晴らしさは変わらない(廣津留さん)

音楽専用の「しらかわホール」に、ヴァイオリニスト・廣津留すみれさんが登場、「本日のテーマに因んで『幸せ』を感じられる曲を選びました」と、エルガーが妻へのプロポーズとして作曲した「愛のあいさつ」を披露します。

3歳でヴァイオリンをはじめ、アメリカで学び、世界を舞台に活躍する廣津留さんは、「みなさんの前で演奏することこそ私の幸せ」と語り、「ロマンス(第2番)」(シューマン作曲)、「エストレリータ」(ボンセ作曲)と、愛を主題にした曲が続きます。

「IT技術の発展で、音楽の仕事もAIにとって替わられるという声も聞きます。でも人間が演奏するライブは『生もの』であって、そのときの演奏やホールの音響、会場の

雰囲気まで、一回きりの時間をお客様も楽しみたいと思うんです」

「生」だからこそ感じられるホールの振動まで味わっていただければ」と最後に選んだのは、ハンガリーの民族音楽に由来する「チャルダッシュ」(モンティ作曲)。

緩急激しい迫真の演奏終了とともに、ひときわ大きな拍手が会場を包みました。



「今」をおざなりにしない(澤田さん)

第二部の「座談」は、信教寺副住職・澤田和幸さんのお話から始まります。

東海学園高等学校の教頭も務める澤田さんは、自校の生徒へのアンケート4項目の結果を紹介します。例えば「どのようなときに幸せを感じるか?」には「(3位)家族や友だちと過ごしている時(2位)寝ている時(1位)おいしいご飯を食べている時」。また、「幸せになるために何をすべきか?」には「周りの人の幸せを願い、人とつながりを大切に、よい人間関係を築く」など模範的な回答傾向に、「よくいえば、ふだんの教えが浸透しているのかなと思えますが、『先生にはこう答えておこう』という意図も感じます。今の高校生は素直で聞き分けがよく、現実的にモノを考え、学校規則にも従順な子が多いです」

そうした従順さが「無意識に自分を抑える

ことの習慣化」だとすれば、幸せとは程遠いのでは?と澤田さんは提起します。

「コスパ」「タイパ」という言葉が流行し、お金や時間を効率よく使うことが正しいとする風潮が、「ムダな労力は避けよう」という考えにつながっていないか。

「科学技術の進歩に比べ人間そのものは進歩していません。脳や身体を使うことに『時短』はないんです。効率がすべてではなく、何が必要で何がムダなのか。時間をかけるところ、省くところの『区別』をつける力を身につけてほしいと思っています」

「時はいま ところ足もと そのことに うちこむいのち 永久の御命(とわのみのち)——浄土宗僧侶で「共生(ともいき)」運動を提唱した椎尾辨国氏の言葉を掲げ、「今が一番大事。今を『おざなり』にしないことです」と述べました。



「今を輝く」ために…

その後、尾木さんは「今の教育現場には『いい子症候群』が蔓延し、子どもたちは本当の心を隠している」と指摘。「教師や親が、子どもの話を聞ける大人になること。叱るときはまず『どうしたの?』と尋ね、言い分を聞いて共感してあげることです」。

廣津留さんは「AIの進化により空いた時間を使って大事なことに集中し、必要とムダを見極めつつ自分の限界を上げていけば、200%進化した自分になってくれる」。

澤田さんは「現在の積み重ねが未来…未来を変えるなら今を変えること。それを生徒の心に刻みつけるのが『幸せの種まき』だと思います」。

最後に戸松義晴さんが「『ありのままの自分』を受け入れると人は笑顔になれます。自分に微笑めない人に微笑めません。ムリせず、優しい気持ちを人に返せるようでありたいですね」と締めくくりました。

